エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２７６号

2025 年 4 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より（１０）

私が 30 年前に普通の会社のサラリーマンから伝道者へ転向しますときに、丁度その時に、同志会という私の学生時代の寄宿舎で寝泊まりをして、40 日ほどお世話になっていました。いよいよサラリーマン生活が終わって伝道者へ入るという時に 40 日ほどご厄介になったその同志会を発つ時、朝早く同志会を発ったのですがその時、私は朝出ようと思ったら、同志会の玄関の先の黒板へ、正確な文句は私忘れましたが、「小西先輩の旅路、平安なるを祈る」と黒板に書いてありました。勇んで同志会を出る時にその黒板へ、私はその送別の辞に対して蓮如上人がおっしゃられた「たとえ一文不知の尼入道なりとも、後世を知る者を知者とする」と、私書いて同志会を出たことを思い出します。今日ここへ出席しています山口良二君がその時同志会に泊まっておりまして、「われわれが送別の字を書いたら、小西先輩がその横に何やら書

いてあった」というようなことを覚えているようですが、文句ははっきりと覚えていないのですけれど、そういうことを書いた。

これは何遍も言う話でありますけれども、私は非常に感銘深い。伝道の始めに当たって、「たとえ一文不知の尼入道なりとも、後世を知る者を知者とする」と蓮如上人が仰せになりました。読んで字の如く、一文不知の何も知らない女でも、後世、後世を知っている者は知者、wise だと蓮如は言った。

ここにある「知者の如く、賢い者の如く歩け」というのは、これは蓮如の言葉で言えば、「後世、後世を目当てとして歩け」という言葉です。まったくこのふたつの教えがピタッと一いているように思います。

なすべきことをなす

　そういうわけで、この世のものでない天国を目当てとして歩くときに、本当に喜び、本当の力が出る。善をなす力、人に親切をなす力が出て来る。これが宗教です。賢く歩けというが、天国を目当てとして歩く時に、この世の役に立つ力が出て来る。この世の一隅を照らす人になれる。伝教大師が「一隅を照らす人になれ」と言われたのは、そういうことです。

17 節「だから、おろかものにならないで、主の御宗がなんであるかをさとりなさい」

「主のみ旨がなんであるかを悟りなさい」と、神の意思はなんであるかと悟れというのは、これが具体的に言えば、自分の目の前に置かれた義務、自分の為したいこおとをするのでなくして、なすべきことをなす。これが神のみ旨です。主のみ旨を為す。天国を目当てとして、そして現在は、ただいまは、目の前の現在の送り方は、今日の生活の仕方は。自分のしたいことをするのでなくして、自分のなすべきことをなす。これが神のみ旨を為すこと。具体的に言えばそういうことです。

エペソ書 5 章 18 節「酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとであり。むしろ聖霊に満たされなさい。」

この 18 節では、「聖霊に満たされよ」という。「聖霊に満たされよ」ということが、この文章の 18 節から２１節迄の問題です。この全文は「聖霊に満たされよ」といったらどうすることかということを説明してある。これは「聖霊に満たされよ」ということです。

聖霊というのはこの世に属する者ではない。天国のものです。神のものです。この世のもので、この生れを受ける時我々は、この世において生きる力、この世において善をなす力、この世において悲しみ、苦しみに勝つ力が与えられる。この世において生きる力、この世において善をなす力、この世において悲しみ、苦しみに勝つ力が与えられる。キリスト教は聖霊です。父、子、聖霊。その聖霊に満たされよ、というこです。満たされたらどういう生活になるかというと、19 節。19 節には、聖霊に満たされると、19 節「詩と讃美と霊の歌とをもって人々の間に語り合い、神に向って心から讃美の歌を歌いなさい。」人間同士では、歌をもって語り合い、神に向かって心から讃美の歌を歌うなさい」人間同士では、歌をもって語り合い、主にむかっては讃美の歌を歌うようになる。

今日のレッスンは、20 節が中心とみてよろしい。聖霊に満たされたら「すべてのこと、いつも、イエス・キリストの御名によって、父なる神に感謝する。」感謝せよと。すべてのことについて、いつで感謝する。こういう人をクリスチャンというのです。これは不可能ではない。可能です。大先生というものは、自分のしていることを弟子の話をする。自分の毎日出来ていることを話しする。パウロ先生は大先生です。彼は自分尾出来ないことを言っているのではない。毎日パウロは実行していることを言っている。これは、弟子のそうせよとパウロが言うからには、これは可能です。

これが出来ない間は、自分は信者と言ったらいけない。これが出来なければ信者ではありません。まだ聖霊を受けていない。パウロは自分が実行していることを、毎日実行して要ることを「そうしなさい」、聖霊に満たされてそうせよと言っている。「すべてのこと、いつでも、神に対して感謝する。」これは天国を目当として生活したら可能です。it's possible.これが出来ない間は、私は信者であると。諸君、言うな。

そしてその方法は、天国を目当てとする方法はちゃんと書いてある。ここに。「イエス・キリストの御名によって」。イエス・キリスト御名と言ったらイエス・キリストの即ち御力、イエス・キリストの力、イエスキリストの贖いの

歎異抄について

　歎異抄という親鸞の弟子の書いた本に、親鸞に向かって弟子が「先生、私はこういうふうにして浄土の話を聴いて喜べと。喜ぶべき理由は十分にある。喜ぶべきでありますけれども、どうも喜ぶ心が起こりませんが、いかがでしょうか」と先生に聞いた。そうしたら先生の親鸞は、「お前も喜べないのか、わしも喜べない」。「本当に喜べないというのが、喜ぶべきことを喜ぶことが、できないというのが、これが煩悩だ」。「しかしその煩悩具足の人間も称名すれば救われると救い主は言ったのだ。」そうですから喜べないにつけても、喜べないものを称名によって救うというその本願の力が無限だから、喜べないにつけても、いよいよこういう者を救うというその本願分かってありがたいではないかと、親鸞は弟子に言ったと書いてある。

　喜べないそういう者を必ず救ってやるというそういう救い、福音だから、喜べない、いよいよありがたいではないか。本願の深さがありがたいではないかと言って、ありがたいとは親鸞は言わなかったけれど救いは確かではないかと言われた。救いが確かであるということは、喜んでいることです。喜んだと歎異抄には書いていてないけれど後ろには、喜べない者が救われるんだ、確かだと言ってたがいによろこんだということが書いてあります。きｈがりゃくしてある。あの本は、喜べないものがともに喜んだこんだということをかいてあるのです。

贖いの力がすべて

　われわれ天国を目当てとして歩くようなったたならば、感謝せよと書いてあるから、感謝しなければいけないのに感謝出来ない。われわれ本当にちょっとしたら感謝の心が無くなって、腹立って人ばっかり責める心になるけれども、我々の救いは、自分の信仰、自分の行ないに寄らない。ひとえにイエスの贖いによる。贖いの力がすべてだ。

　その贖いの力をわれわれに味わうことが出来るように、称名というかたちで神はわれわれに提供している。われわれに下さっている。そうですからわれわれは「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と。喜べない自分、天国を目当てとせよと書いてあるけれど、自分はこの世のことが目当てになって来る。そういうわれわれ、これを罪人という。そういう我々罪人を、誰でも出来る称名、称名の形において贖いが提供されているということを、なんとありがたいと言わざる得ないではないか。称名という形、「わが主イエスよ。我が主イエスよ」この［エペソ書第 5 章］20 節は、「イエス・キリストを称名することによって、天国へ行く望みがいよいよ確実に与えられて、すべてのことを感謝し、いつも喜べる」と解釈したらよろしい。イエス・キリストの名を呼ぶ、称名することによって、いよいよ天国の望みの確信を与えられて、全てのことに・いつも感謝しなさい。

これはすぐには行けない。暫時、聖霊、我々に望むによって、これは可能です観音経に、生老病死の苦、漸をもって滅せしむ」ということが書いてある。「漸」という字は、自然に段々だんだんなくなるということです。内村鑑三は、「聖霊は徐々に降る。一生、徐々に下る。力は年と共に増す。」と言った。キリスト教は、聖霊教ですよ。真理の御霊教です。急ぐなかれ、「聖霊は徐々に下る。

喜ぶと共に、それと同じ力をもって、パウロは、「たがいに仕えよ」と書いてある。たがいに仕える。21 節「たがいに仕えあうべきである。仕え合うというのは、「従う」というじです。ドイツ語」の untertan と書いてあるが、それは従うという字です。

天国の望みははっきりして来るとときに、互いに人に仕える精神が起こって来る。「仕える精神」という精神が居こって来る。われわれ、こうしたい、人に使えさせたいう、自分がつかえるという精神がない。そうですからじきにけんかになる。

大体、教の大事なところはそういうふうなこでありました、11 年前は称名ということが分かっておりませんでした。そうですから、称名のことを言いませんでした、今日主のみ名を呼ぶ「わが主イエスよ」と「わが主イエス

よ」と主のみ名を呼ぶことを私は実行したい。将来、全てのことについて、いつで感謝するとになりたい。現在はそうなっていないけれども、将来すべてのことにいて、称名しつつ、そういう者になりたい、そして、これは「なれる」と私確信する。伝教大師が言われた一隅を照らすものとなりたい。